

「本を読むのが苦手な人へ」

経済学部講師 西成 典久

正直、私は本を読むのが苦手である。研究職の片隅に席を置きながら、こんなことを言うのは気恥ずかしいが、これが私の正直な気持ちなので仕方がない、と最近では開き直っている。

考えてみると、私の読書に対する苦手意識は物心がついた頃から続いている。大学受験では理系を選択したのだが、その理由の一つに本(文字)を読むことが苦手だったことがある。にも関わらず、現在は本を読み書きすることに大半の時間を割く職業についている。しかも、私の研究分野は、歴史的文献資料を発掘し、読み説き、論文を書くということが作業の中心となる。我ながら、なんと自己矛盾だろう、と時々思う。

本とのつきあい方は人それぞれだ。読書に対して苦手意識を持つ人は、勢い、本から遠ざかってしまうところがある。しかし、本を読むのが苦手だと思う人にこそ、本とのつきあい方を考えてもらいたい。本は自分を新しい世界へと導いてくれる。だからこそ、苦手だという理由で本を読まなくなるのはもったいない。とにかく重要なことは一つ。本を読むことで得られる知的興奮を一冊でもいいから体験すること。これさえ体感すれば、苦手意識を克服することはできなくとも、本とうまくつきあうことができるはずだ。

では、その一冊をどう見つけるか。最も手っ取り早くていい方法は、自分の興味のある専門分野の大学教員に本を紹介してもらうことだ。折角大学にいるのだから、図書館だけでなく、ぜひ周りの大学教員をうまく利用してほしい。皆喜んで本を紹介してくれるでしょう。

「図書館利用の意義」

連合法務研究科3年 神近 陽平

私は、他大学出身であるので、学部時代、本図書館を利用したことはない。といっても、出身大学においても数えるほどしか図書館を利用することはなかったので、香川大学の学生であったとしても、同程度の利用状況だと予想することができる。

しかし、本大学連合法務研究科に進学した私は、毎日のように図書館を利用している。あるときは図書を借り、またあるときは図書館の蔵書に囲まれながら学習をしている。

このように毎日図書館を利用することによって、図書館を利用する意義というものを見出すことができた。

第一に、本を借りる場合においては、本がどの辺りにあるかを探さなければならないが、それを探しているときに、多くの文献を見出すことができることにある。これは、自分が借りようと思う本を借りることが第一の目的であるが、その本の周辺には同じ分野の本が多数並んでいることから、それらの文献も手にとって比較検討することができることに意義があるといえる。幸いなことに、本図書館では、古い文献とともに比較的新しい文献も揃っていることから、新しい議論を取り入れた比較検討もしうところに大きな意義があるといえる。

第二に、図書館のように静かな環境において学習することで、集中力を高めることができるし、また、このような場所での学習は気分転換にもなるということに意義がある。

私は連合法務研究科に所属していることから、専用の自習室において集中して学習することができるが、やはりずっと同じ場所で学習していると集中力が切れてくる。そのときに、同じく集中して学習できる図書館があることは、集中力を高めると同時に気分転換になるといえるのである。

ただ、図書館で学習しているときに、自分の周りだけかもしれないが、普通に私語をしている者をよく見かける。このような行為は、上記に示した図書館利用の意義を損なわせるものであるといえるので、直ちにやめていただきたい。私語をするのであれば、なにも図書館で学習する必要はないのである。

このように、図書館利用については以上のような意義が見受けられる。そして、私は、以上のような意義を図書館利用に見出しているため、これからも多々利用させていたくつもりである。